

愛の氷点



高木徳一

鬼加奈の正式名は鬼沢加奈子。

小さい頃から、『鬼加奈！』とか『鬼が来たぞー！』とか悪童共に言われ続け、泣けば泣いたで『鬼の目に涙』と囃し立てられ、嫌な思いを散々してきた。目尻が釣り上がった細目で、表情はなく、身体も細く、背丈だけは学年でも後ろの方。中学生になって、言いたい奴には言わせておけばいいやとの半ば開き直った気持ちちが芽生え、自分ではのほほんとしていると思っていたが、叩かれてきたお陰で、負けず嫌いの根が張ってきた。

鬼加奈は葛飾区立S中学から東大合格者数が都内ベストファイブに入る有名な進学校の都立K高校に、顔では皆に負けるので勉強にいそしみ、何とか滑り込めた。

男女共学で六年级のB組になり、担任は物理担当の本山善太郎五十歳であった。

先輩から引き継がれた渾名は『コロ』。
小振りな犬のようで愛らしい。

後日、『コロ』という犬を飼っていると保代（やすよ）君に言われた時にはその偶然に驚いたものだ。犬とは違って、授業中、眼鏡の奥から発する眼光には鋭さを感じた。並ぶと、鬼加奈の顎の辺りに担任のふさふさした黒髪が当たる。

背の低いのは親の遺伝子に加え、昭和二十年生まれのせいで食糧難のため、美味しい物をたらふく食える時代ではなかったからだ、時折り、弁解がましく主張する。

戦争に敗けて俺達が耐え忍んできたから、親が苦労してきたからこそ、お前達の今があると言う。ぬけぬけと大きく育ち、物質面で何不自由無い。携帯電話だ、インターネットだと騒いで、居ながらにして世界各地のブランド品を購入したり、音楽を聞き、映画を観たり、ゲームが出来る。これらの機器の発達も、純粹な基礎科学である物理学の先駆者のお陰であるとも。光、波動、電気から応用して、電信、電話、ラジオ、テレビ、インタ

ーネット、そして携帯電話へと、通信機器は一大躍進を遂げた。また、医療の分野においてもしかりである。X線の発見からレントゲン装置、超音波診断装置、核磁気共鳴を利用した断層撮影へと発展し続けている。例え、物理学の専門家にならなくても、身の回りに溢れ返っている生活器具、機器などの基本的な原理位は覚えていて罰は当たらない。学校の試験や大学入試にあるから仕方なくやるのでは面白くない。原理を学び、両親、兄弟姉妹や知人に優しく説明出来れば、誰もが違った目でそれらを見直すと思う。

このように、常に物理学そのものとそれを応用した機器について、例を挙げて熱っぽくコロちゃん語ってくれた。鬼加奈は物理の授業が待ち遠しい。数学と同様、公式に数値を代入すれば一つの答えしか返ってこない事が鬼加奈の性格には合っていたのだ。

同じ絵を鑑賞しても、Aさんは疲れ切った寂しそ

うな雰囲気を感じられると、Bさんは耐え忍び、内なるエネルギーが伝わってくると言ったり、Cさんは大都会の生活そのものを写真していると主張する。このように、芸術は送り手の思いは一つであるのに、受けての感性によって幾通りにも回答がある事に鬼加奈は付いて行けなかった。

三歳違いの姉は早稲田大学文学部で日本文学を専攻中。休日には、読書をしたり、エッセイや短編小説を書く。両親は理科系なのに、姉は誰の血を受け継いだのだろうか。何代か前の文系祖先の血が濃く混ざっていると考えるを得ない。こういう事から、姉とは高校に入ってから余り言葉を交わしたことが無い。また、親友からは小柄で団栗目の姉と比較され、本当の姉妹かと疑われてしまう程に、身体面も似ていない。

コロちゃんは結婚の馴れ初めも語ってくれた。

日大の学生時代に、友人の家に遊びに行った際、彼の妹がお茶を運んでくれた。着物姿で座り、両

手で障子戸を開け、閉め、お茶を勧めてから静かに下がる。その物腰の柔らかさ、慎み深さを感じ、一目惚れしてしまったと。六段の調べが障子の隙間から流れ入る。澄んだ音色に心が洗われたと述懐する。

生徒は一斉に、やんやの拍手を送った。コロちゃん、の頬がほんのり色付く。信じられないと思った。理論的な物理学を専攻してきた先生が一目惚れとは。自分の過去を、経験を、本音で話すコロちゃんに、生徒の人氣は鰻上りであった。車内で女性がガムを噛んでいた、お化粧を塗りたくっている図は我慢出来ず、このような女性を嫁さんしないことと、男性陣に釘を刺すことも忘れなかった。

鬼加奈にとってもう一つ好きな授業があった。当然数学。担当は藤枝敬子、三十六歳のオールドミス。一五八センチの小柄ながら、やや肥満体でボイン。円い鰻頭を上下にへこましたような顔付

きで赤い口紅を唇からはみ出している。まるで、仕方なくしているよう。キーが高く、しかも後ろの壁まで壊さんばかりの声を張り上げ、授業をする。名物は『即席テスト』。微分方程式や積分方程式の説明を太い文字で書きながら、黒板に喋り続ける。例題を二つ解く。振り向いて質問を受ける。その後、問題を三題板書。皆、自分が当たらないよう俯き入掌。指名された回答者は黒板に向かい、頭を掻く者、一字も書けない者、途中で喰う者、たまにスイスイと終わる人も居た。

各人、その経過を説明する。先生は経過も重んじ、十点満点で採点。五点以下の男子生徒には、厚紙の出席簿を両手で頭にゴツンと容赦なくぶち当てる。女生徒には、柔らかに。採点結果をメモしておき、本試験の時に、たまたま出来が悪かった場合、普段の点数を加味してくれる優しさもある。チョークの白い粉が黒髪に飛んでいるように振る払おうともせず、生徒一人ひとりに数学の面白さを

体得して貰おうと、頭の天辺から高音を響かせる。数学以外の話はしない。ど迫力、熱血振りに圧倒され、自分もこんな先生になってみたいと思う。悪がき共は『ぐちゃまん』と渾名命名。ぐちゃつと潰れた鰻頭のような顔が、その名の由来で、巧く付けるもんだと鬼加奈は感心する。

自分が数学の先生になった時の渾名はと、ふと思つた。

或る日、板書していた藤枝先生がいきなり振り返りながら、「何を喋っているのだね、後の生徒は！ 質問は手を挙げて、無駄話なら止めなさい！ どうせ家では勉強しないのだからせめて授業中位は集中しなければ遠慮なく落第させるわよみなさい、鬼沢さんはクラスでは金子君と一、二位を争って、学年でも三百人中いつも十番以内には入っているわ。爪の垢でも貰って飲んだら良いわ」と赤鬼の形相で怒鳴った。これ以来、鬼加奈に対する精神的苛めは少なくなつた。

上位百番以内の中間と期末のテスト結果が廊下に張り出され、英数国社理の五教科の総合点では八十番前後だが、数学では常連の上位ランク者で鼻が高い。益々数学に熱を入れた。

鬼加奈はクラブ活動としてバスケット部に入つた。

新入部員は十五名。一流進学校ながら昨年はインターハイで男子は三位に入賞。二十五年の歴史の中で都立高校が三位以内の入賞は初の快挙とのこと。女子は七位で、男子に追い付く事が念願となつていた。

放課後の練習日に、一六〇センチそこそこだが、脚がぶつとい男子生徒が難なくミドルシュートを決めている。アトラクタ五輪をテレビで観た、あのアメリカのドリームチームのシュート率と同じ位の九十%以上。神業に近い。そんな人が目の前に居るとは。自分の未熟さを恥じる。天才だから仕方ないのかなと、ボールを持ったまま見惚れて

いると、「ああ、あの人、金町敬二君ね。中学時代、

東京都ナンバーワンのプレーヤーよ。あなた、知らないの」と、級友の川瀬芳美が奥目をしばたかせながら汗を拭い、教えてくれた。

中学時代は、区の大会でも出ると負けで、都の大会はトンと無縁であつた。

「大きな声じや言えないけど、体育会系の推薦入学だつて噂もあるのよ」

信じられなかった。私立高校ならいざ知らず、天下の都立高校にそんな枠があるなんて、不公平じゃない。私達は勉強して合格したのにと。一途な鬼加奈はカチンときた。

噂なんだし、確かめた訳でもないの、そんな目で彼を見るのは止そうと直ぐに思い直す。

「ほら、あそこに居る・・」

芳美の指す方へと鬼加奈の視線が動いた。

「スラッとした優男、花里保代君にも同じ噂があるのよ」

言われてみれば、他の部員と比較して技術が数段

優れている。ジャンプ力、シュート力、身のこなしと、どれをとつても大学生も顔負けだと思つた。

でも、同じ仲間になつたのよと自分に言い聞かせる。折角だから、あの人達の技術を盗んでやろうと、負けず嫌いな鬼加奈は心に誓うのだった。

隅田川の川風が熱気に溢れる体育館に入り込んでくる。東京湾に近いせいか、潮の香りもチョツピリ含む。

鬼加奈は金町や花里のあの技術に迫り着きたい一心で、練習日は当然、昼休みも毎日ボールを持つ。シュート率も幾分上がったように思え、嬉しくなつた。

待ち望んでいた夏休みに入り、前半五日間と後半五日間の男女合同の合宿がある。

私立なら当然、高原などの涼しい所にも体育館が在つて、新鮮なオゾンを胸一杯吸つてのびのびと優雅に過すのだろう。都立高は学校そのものが宿

舎兼練習場。

鬼加奈にとつて初の合宿となる。

中学時代は徒歩二十分の学校に夏休みの間の一週間通つて練習した事はある。男女合同と頭で反芻し、期待に夢を膨らませる。着替え用の洋服として色取り取りの物を多めに取り揃え、バンビが跳ねている絵柄のバックに詰め込んだ。遠足に行くような華やいだ気分になり、中々寝付けない。

皆も寝不足らしく赤い目をして来た。

台東区に在る四階建て鉄筋コンクリート校舎の三階の東端が女子の合宿所となる生活科室。隣の図画工作室が男子用。

朝六時に起床し、窓からは川面にぎらつく光の乱舞が見下ろせる。

「さあ、やるわ」鬼加奈は一声上げ、甘い空気を小さな胸に大きく吸い込んだ。

洗面を済ますと畳の上に座卓を並べ、朝食を摂つ

た。

八時に全員が校庭に集合。入念に準備体操、柔軟体操をして二百米を一周し、男子に続いて校門から飛び出した。柳橋界隈は未だ目覚めていない。

数は少なくなつたと聞いている芸者置屋を通り過ぎる。何時だったか、夕方正門から出た時に出会った人力車に乗った中年の芸者の襟を抜いた白塗りの首が印象的だった。更に、料亭、靴や洋服の間屋街を走り抜け、両国橋を渡り、墨田区側を上流へとひた走る。ポンポンポンと焼玉エンジンの音が時折り小気味良く耳をかすめる。

右手の古びた五階建てコンクリートの同愛病院を視界に捉え、左手の蔵前橋をやや上る。呼吸が乱れる。

六キロの行程を終え、蔵前通りに面した裏門から校庭に戻った。裏門の前には蔵前国技館が在り、場所に入ると幟がはためき、賑やかになる。

その国技館に関し、先輩から伝えられている逸話

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。